

日本における中国人留学生と中国人労働者が増え続けている中、彼らが日本社会に適応できているかどうかという問題は非常に重要な問題である。さらに、多くの外国人労働者は留学生から就労者へという経路を経ていることから、中国人留学生の日本社会への適応問題は殊に重要なものとなってくる。そのような中国人留学生の日本社会への適応が本研究の問題関心である。さらに、その適応を促進する方法を考察することもまたその関心のうちに含まれる。

第2節 第一の壁：日本語（英語との比較）

多くの日本に来た中国人留学生にとって、まず適応の第一の壁となるのは言語である。日本語には漢字があり、また呉音・漢音・唐音（宋音・唐宋音）・慣用音など、中国に由来する発音があるため、中国人にとって、世界の他の国の人々と比べ、日本語を理解することが比較的容易であることは事実である。しかし、日本語の教育が普遍化していないため、多くの留学生は、留学を機に初めて日本語に接触することになる。それに対し、中国人の若い世代、特に1980年代以降に生まれた人々は、英語を母国語とする人々のレベルにまでは達していなくても、日常会話のできる人々が大半を占めている。その違いは中国における英語教育と日本語の教育の現状の違いに起因する。本節は、中国の英語教育と日本語教育の現状を考察する。

中国は1990年代から小学校からの英語教育の実施が始まった。1992年国家教育委員会の九年義務教育の規定により、全日制小学校と中学校に英語が増設科目として可能となった。さらに2001年教育部の義務教育課程設置実験法案は、英語を正式に小学校の授業科目として規定し、小学校三年から開設すると規定した。その後2003年からは小学校一年生から始めることとなった。現在では、全英語教育制の小学校や幼稚園もある。

一般的な学校でも、国家教育部の授業設置方式により、英語の授業は中学校卒業まで、全科目に課される時間の6~8%以上の割合を占めることが要求されている。また近年の高校受験でも、英語が主要科目の一つとしての地位を有している。例えば、中国吉林省の高校受験の総合点は600点であり、そのうち国語、数学、英語が各120点である。また大学受験でも、「3+X」の方式が実施されている。「3」はそれぞれ国語、数学、英語である。「X」は地方によって違う。全国の大学の卒業条件として、全国統一の英語レベル試験（Collage English Test, CET）四級以上の合格が必須条件として位置づけられている。大学院進学者は、全国大学英語六級の合格が義務付けられている。それ以外にも、他の英語資格試験、たとえば、全国公共英語等級試験（PETS）、TOEFL、TOEICなどが進学や就職の時に影響する¹⁰。

宮内敦男（2005）「中国における英語教育の現状——日本の英語教育を再考するために」

¹⁰ 百度文库 “中国的英语教育政策及其作用”

<https://archive.is/dJT4a> Accessed: 2016年1月28日 05:31:49 UTC.

においては、中国の英語教育の普及は中国の経済と関係しているとの指摘がある。英語が主流となったのも、経済的発展と共にその必要性を認識した結果である。その認識は中国の政府だけでなく、一般の中国国民の間でも「英語力＝金儲け」と考えられているほどである。この論文の中では中国の近年の英語学習の象徴的な人物であるリー・ヤン氏の例が挙げられている。彼は「英語を話して、日欧米に打ち勝ち、金を儲けよう」と呼びかけているという。実際に英語力がある人が就職しやすく、英語を話せない人と比べ倍以上の収入を得ているという事実がある。そのような考えと環境事実は多くの中国人に影響を与え、自ら積極的に意欲をもって英語を勉強する人も多い。

さらに、上記の論文の中では、中国の英語教育も日本と同様に過去においては文法・読解力・特に語彙を増やすことに力点が置かれてきたとの指摘がある。今でもその状況は完全には改善されてはいないが、近年、実用英語教育の実施が見られる。完全に英語で英語を教える学校が増え、また英語の教科書も英語で解説されている。

このような環境の中で、中国の英語教育は決して早いとは言えないが、世界的に英語能力の高い国へと成長してきた。たとえば、TOEIC 試験の国別平均スコア（2013 年）では、世界第 12 位の 716 点となっている。1 位から 11 位までの国は、主に英語を母国語または official language とする国が多い¹¹。

その一方、中国の日本語教育はどのような状況であろうか。国際交流基金が実施した 2012 年度日本語教育機関に関する調査がある¹²。ここではその結果を抜粋し、簡潔にまとめる。まず、否定できないのは、日本語は英語に次ぐ第二の外国語の地位にあるということである。この調査で、2012 年現在、中国の日本語学習者は約 105 万人いるということが分かる。しかし、英語教育とは違って、初等教育（小学校など）の学習者はわずか 3,100 人であり、高等教育段階の学習者が全体の 64.9%を占めている（図 1-5）。小学校での外国語教育は、全国のほとんどの小学校では英語を導入している。日本語を導入しているのは中国東北部の一部の実験校である。また高等教育においても、日本語を専攻している少数の学生以外、ほとんどの学校では英語を必修科目の第一外国語としており、日本語は選択科目の第二外国語に分類されている。

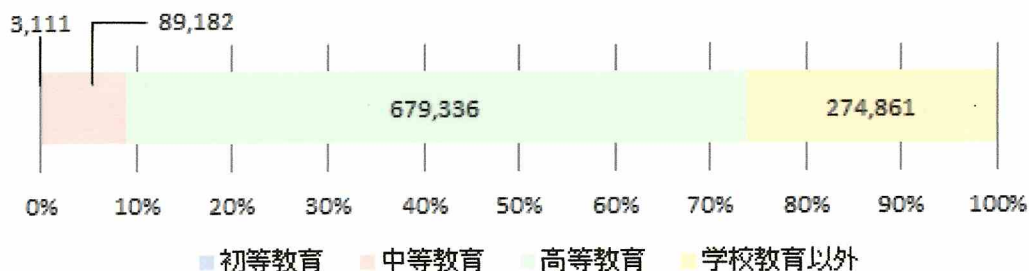
¹¹ TOEIC テスト国別平均スコア（2013 年）

<http://archive.is/IAbi9> Accessed: 2016 年 1 月 31 日 10:35:53 UTC.

¹² 国際交流基金 2012 年度中国における日本語教育機関調査結果

<https://archive.is/8htki> Accessed: 2016 年 1 月 20 日 01:55:02 UTC.

図 1- 5 2012 年度日本語教育機関調査結果 学習者数グラフ



上記の状況により、日本に留学しようとする多くの中国人は、留学を機に初めて日本語に接触することとなる。言語は日本社会へ適応しようとする際にまず克服しなければならない第一の壁となっている。

第3節 第二の壁：日本文化

日本と中国は一衣帯水の隣国であり、日本文化の源流も中国からの影響を受けていると言われている。日中両国の文化において、類似している部分は確かに多いが、同時に相違している部分も少なくない。

文化の相違している部分として挙げられる例は、非常に多い。たとえば、日本では左車線に対して、中国では右車線である。日本では書籍が縦書きであるのに対して、中国では横書きである。日本ではお酒を水やお湯で割って飲むのに対して、中国では水の混ざったお酒が粗悪品になるなどの例が挙げられる¹³。

多くの中国人にとって、日本に親近感を持つ理由の一つとして、言語が挙げられる。そして、ここでいう言語は実際に会って交流時に使う言語ではなく、書面に文章の形として使う言語のことである。日本語の文章では漢字が占める比率が高く、日本語を勉強したことのない中国人でも、文章の意味を理解できる時がある（もちろん、同じ漢字でも日本語と中国語は違う意味になる単語が多い。例えば、日本語の「手紙」は英語の「letter」だが、中国語ではトイレトペーパーの意味になる。また「愛人」という言葉は、日本語では不倫相手の意味だが、中国語では配偶者の意味になる）。日本語にも漢字があるため、日本語を勉強している多くの中国人にとって、日本語の入門的な勉強は他の言語と比べて比較的容易である。しかし、日本語を完全に把握していても、日本文化に対する理解が十分でなければ、コミュニケーション（交流）に支障をきたすケースもある。たとえば、こんな会話がある。

¹³ 図で示す日中の文化差異

客：「これを返品したいです。」

店員：「申し訳ございません。ちょっと…」

日本人であれば、すぐに「ちょっと」は返品できないという意味だと理解するが、日本文化を十分理解していない中国人はおそらく店員に「返品できないということですか」ともう一度確認してしまうことになる。安本真弓は「日中文化の相違に関する一考察：語用論の立場から」という論文の中で、中国のファーストフードなどの店で飲み物を買う時の会話の例をあげている（安本 2014： 10）。

店員：“要不要吸管。”（「ストローは要りませんか。」）¹⁴

客：“要。”（「要ります。」）

日本は、次のようになる。

店員：「ストローをお付けしましょうか。」

客：「お願いします。」

安本真弓は中国のコミュニケーションが直接で明瞭、機能優先という特徴を持つ「キャッチボール」式交流であるのに対して、日本のそれは間接で曖昧、情緒優先という特徴を持つ「ドッジボール」式交流だという（安本 2014： 10）。

このように日本人が yes と no をはっきりさせないのは、相手との関係を考慮してできるだけ相手の情緒を優先した結果である。情緒優先の特徴は日本人の時間観念にも影響を及ぼしている。中国人は友達であれば、突然に遊びに誘ってくるのがよくある。そしてたとえ事前に約束する場合でも、〈何時ごろ〉と約束することが多く、具体的に〈何時何分〉まで特定しないのが普通である。日本人の場合では、まず突然誘うことはあまりなく、そして約束する場合は何時何分まで特定する。またよくあることは、相手の「情緒を優先」し、暇かどうかを会話のやりとりで探ってから誘う。そのことによって、友達の日頃の遊びでも一カ月後の約束をすることが多い。

また、山久瀬洋二は『完璧すぎる日本人』の中で、日本人が外国人との交渉や、海外でのプレゼンテーションが下手な原因は、日本人が完璧にこだわりすぎることにあると指摘している（山久 1966： 10-15）。「日本人は、すべて準備を整えて、全員のコンセンサスを構築してからでないと、前に進もうとしないのです」。そして日本人のビジネスの決裁は「入り口で完璧に拘る」と述べている。そのため、組織では年始に年間計画を立て、いつごろ何をするのかという計画ではなく、何日何時に何をするのかという細かい計画を立てる。それは中国とは非常に異なる。中国では“計画追不上変化”（「計画は永遠に変化に追いつかない」）という言葉があるように、細かい計画を立てる時は週間単位で、年間計

¹⁴ 以下、中国語を原文で表記する際には“ ”を、その日本語訳を示す時には、その直以後に（「 」）で記す。